

再チャレンジ懇談会（第3回）の概要

1. 稲田再チャレンジ担当大臣冒頭挨拶

○稲田再チャレンジ担当大臣 皆さんこんにちは。本日はお忙しいところお集まりをいただきまして、ありがとうございます。私は第2次安倍内閣で再チャレンジを担当させていただいております。

安倍総理もみずから、御自身自身も自分も再チャレンジだと。そして日本は一度失敗した人とかやめてしまった人とかにも、もっと温かいまなざしを向けて、そういう頑張ってもう一回チャレンジしようという人をぜひ支援したいという強い思いを持っておられまして、そういう担当大臣に指名をされております。

この再チャレンジ懇談会は今まで2回、官邸と(政府合同)庁舎で開催をいたしております。その中で若者、雇用、障害者、スポーツ、また、一度事業に失敗した方々とか、その方々を支援して下さっている人たちのお話を聞いてきました。再チャレンジに対しては、私はもちろん施策もいろいろ重要ですが、そういう意識というか社会全体の取り組みというのが必要なのではないかと考えています。

今回、栃木県に来させていただいたのは、きょう、知事もお見えいただいておりますけれども、非常にいい取り組みをされている。学校卒業後も自分に合った就職先が見つからない若者への就労支援であったり、それがいろいろな支援の団体や機関が非常に連携をされている。また、いろいろといい取り組み、また、全国有数のものづくりを支えている中小企業の再生支援において、非常に高い実績を上げておられるということでございます。ぜひ皆様方からいろんな御意見を寄せていただければと思います。きょうはどうぞよろしくお願いします。

2. 福田栃木県知事挨拶及び栃木県の取組紹介

民間の出席者の皆様方は、お忙しい中ようこそおいでいただきました。日ごろの御活躍に心から敬意を表したいと思っております。

栃木県は昨年末、ゆるキャラグランプリで「さのまる」が見事逆転優勝いたしました。また、今年に入りましてからは3年ぶりにギョーザ日本一を奪還いたしました。さらに1月末から2月初めにかけて、日光で冬季国体が開催されまして、アイスホッケーは総合優勝を飾り、天皇杯がスキーを除いて第9位ということで16年ぶりの好成績をおさめることができました。この勢いで、今日おいでの皆様方とともに1年保ち続けていきたいと考えております。

では、説明につきまして資料2を使いながら申し上げたいと思っております。

まず、若年者の雇用対策についてですけれども、大変厳しい状況が今も続いていると認識しております。有効求人倍率につきましては堅調ですが、失業率は35歳未満の若者の部分が全体に比べて高い数字となっております。また、大卒者、大学進学者の就職状況につきましても、卒業者の2割がフリーターあるいは無業者になるなど、安定雇用に就けない人も多い。さらに就職を果たしたものの3年以内に退職してしまうという大卒者も約3割を占めるなど、就職後の定着も大きな課題となっております。将来のある若者が安定した職業に就き、意欲、能力を生かして活躍をしていくことが本人のみならず、元気度日本一栃木づくりのためにも重要なことでありまして、本県におきましてもフリーター等の安定した職に就いていない若者に対し、一人一人の就労意欲あるいは適正、能力に応じたさまざまな就職支援を行っております。

資料2の若年者の雇用対策をごらんになっていただきたいと思いますけれども、3つの柱を掲げております。学卒者等雇用対策、若年者就職スキルアップ及びとちぎジョブモールにおける総合的な就労支援でございます。

1つ目の柱、学卒者等雇用対策ですけれども、求人企業合同説明会や面接会を開催することによりまして、学校を卒業したのにすぐに就職が決まらない若者について、1人でも多く就職してもらえるよう、若年求職者と企業との出会いの場を提供するものでございます。

2つ目の若年者就職スキルアップについてでありますけれども、STEP1～4まで事業が階段状に並んでおりますが、STEP1の就業体験事業では、就職経験の少ない若者に実際に職場の仕事を体験してもらうことによって職業観を持ってもらい、STEP2の就活講座では、就職活動に失敗した経験を持つ若者等を対象に、ビジネスマナーやコミュニケーション能力など、社会人としての基本的な力を高めて、STEP3の若年求職者バウチャー事業につきましては、職業訓練の利用券、いわゆるバウチャーを交付して教育訓練の助成を行い、大型免許、フォークリフト、0A関係、介護職、医療事務などの資格取得を支援しております。これは17年度に国のモデル事業としてスタートしまして、18年度から県単独事業で今日まで行っているものでございます。

さらにSTEP4の就職応援プログラムでは、OJTとOFF-JTを組み合わせ、実務経験の蓄積や座学等による基礎的スキルの習得により就職を支援してまいります。こういったように若者の状況に応じて就職へのステップアップができる流れとなっております。

最後に3つ目の柱のとちぎジョブモールにおける総合的な就労支援でございますが、JR宇都宮駅西口にあります県の施設であるとちぎジョブモールにおきましては、国のハローワークと連携し、若年者を初めさまざまな求職者を対象に総合相談からキャリアカウンセリング、職業紹介、職場定着までの支援をワンストップで行っています。

とちぎジョブモールには、新規学校卒業者等を支援する宇都宮新卒応援ハローワークが併設されておりまして、また、とちぎ若者サポートステーションのサテライト窓口にもな

っておりますことから、働きたいけれども、一步踏み出せない若者に対し、就職活動の段階までの自立、就職活動の準備、就職そのもの、あるいは就職後の職場定着というように、国のハローワーク、県の就職支援施設、若者サポートステーションが一体となって切れ目のない対応をしております。このような事例は全国的にも類を見ない先進的なものでございます。

県内には県央地区のとちぎ若者サポートステーションのほかに県北、県南の若者サポートステーションがあります。これら3つのサポステと関係機関等で構成する若者自立支援ネットワーク会議を設置しまして、連携しながら若者の職業的自立の支援をしております。特に本日出席されております中野さんがセンター長を務めておりますとちぎ若者サポートステーションは、平成25年度上半期の相談件数が全国1位となっております、その熱心な支援には敬意を表したいと思います。

今後ともジョブモール中心に関係機関と連携を図りながら、若者が1日でも早く就職できるよう支援してまいります。

女性、若者、シニア等を対象とした創業・起業支援の取り組みですけれども、再チャレンジに関連し、国の成長戦略に呼応した県の新年度事業を1つ紹介したいと思います。出産、育児、その他の理由によりまして離職した女性、若者や定年退職したシニアの方々がみずから事業を起こす場合への支援事業であります。栃木県ではこれまで創業希望者に対して、事業計画作成のサポートや事務所改装費等の創業に要する経費の一部助成などの支援を行ってまいりましたが、さらなる企業の創業を促進するために平成26年度、この4月ですけれども、新たな事業に取り組むこととしております。

創業支援に実績のある民間団体等のノウハウも活用し、創業希望者同士の交流促進や創業塾の開校、専門家による相談の充実を図ってまいります。さらに県の制度融資、創業支援資金に女性・若者・シニア支援枠を創設し、現在の創業支援資金よりも利率等の融資条件を有利に設定するなどしまして、金融の面からの支援にも取り組み、創業前から創業後、事業が軌道に乗るまでの各ステージに対応した支援に努めてまいります。

また、新たにビジネスプランコンテストを開催しまして、優秀なプランには激励金を交付するなど、創業しようとする方の意欲の喚起、インセンティブにつなげてまいりたいと考えております。

失敗しても何度でも再チャレンジでき、大臣おっしゃいましたように努力が報われる社会を構築することは私も重要であると考えておりまして、本日説明をした取り組みを初めとして、関係機関と連携をしながら再チャレンジの支援に取り組んでまいりたいと思っております。

以上です。

3. 出席者からの発言

○出井正貴氏 有限会社ココ・ファーム・ワイナリーよりまいりました出井正貴と申します。本日はこのような懇談会にお誘いいただき、ありがとうございました。

今回、再チャレンジ懇談会にお誘いいただくに当たりまして、正直悩みました。自分にとって再チャレンジという言葉に特に思い当たる節もなく、前回、前々回の参加者の皆様のように大きな内容もなかったためであります。その後、内閣府の方や地元の商工会議所の方と話す中で、文字どおりの再チャレンジではなくとも、非正規雇用の状態が正社員にステップアップすることができた若者の事例、そして、きっかけとなったジョブ・カードを活用した訓練がどうであったかを含めて、ありのままの経験を話してほしいとお言葉をいただきまして、本日はお話をさせていただきます。

私は大学卒業後、特に大きく就職活動を行うこともなく、かといって全くしないでもなく、「まあ、何とかなるだろう」という気持ちでおりました。というのも、大学時代、私の周りでは演劇やバンドの道を志す友人や先輩が多く、彼らもいわゆる就職活動をしていなかったもので、そうした周りの影響を受けておりました。現在の会社にも最初は就職活動しながらのアルバイトという形で入社いたしました。

まず、簡単に弊社の説明をさせていただきますと、知的障害者の自立支援施設「こころみ学園」の園長、川田昇が1950年代に当時の特殊学級の中学生たちとともに、栃木県足利市に開墾したぶどう畑がスタートとなっております。その後、酒税の関係でこころみ学園ではワインの醸造免許が取得できなかったため、園生の親御さんたちによって有限会社ココ・ファーム・ワイナリーが設立され、30年間、地道に真摯にワインづくりを行ってきました。

その後、ワイナリーとして非常に名誉なことに、沖縄、洞爺湖で行われましたサミットでワインをお使いいただいたりと、たくさんの方の御支援をいただきワインづくりを続けてきたワイナリーです。

私がここでアルバイトを始めたきっかけも、ほんの些細なことに過ぎません。消極的、積極的にかかわらず、いつかは就職しなければならず、そのためには就職活動をしなくてはならないと考えておりました。そこで生活費が高い東京にそのままいるよりも、地元に戻って就活をしながら少しバイトでもと思っていた矢先に、新聞の折り込み求人広告にココ・ファームを見つけ、「どうでもいいバイトをするくらいなら、ワイナリーで働くほうがカッコいい」そんな理由で申し込み、採用をいただきアルバイトとして勤務することになりました。

ただ、いつかは正社員になりたいと考えており、ワイナリーでもバイトはあくまでも就職活動をしながらの予定でしたが、水があったのかあれよあれよと1年が過ぎ、2年、3年がたちました。ちょうどそのころ、ジョブ・カードを利用しつつOJTとOFF-JTの訓練をしながら、若者の正社員へのステップアップを応援するための助成制度があるということで、地元商工会議所から会社側にこの制度を利用して正社員を育成してみないかとの打診

があったようで、会社のほうから私にジョブ・カードを利用して正社員登用にチャレンジしてみないかとのお話をいただきました。また一から就職活動をして別の会社に入るよりも、ココ・ファームで正社員になることができると快諾いたしまして、ジョブ・カードのいわゆる雇用型訓練に基づく研修を行い、改めて正社員として入社させていただきました。

ジョブ・カードを利用することは、もちろん私にとっても会社にとっても初めてのことでしたが、地元商工会議所の方には制度の活用を進めるという立場もあったと思いますが、非常にお世話になりました。

ジョブ・カード制度が訓練内容としていますOJT、OFF-JTの調整についても、指導担当の社員の方のおかげで無事に訓練を終了することができました。私自身、それまではアルバイトとして店舗での販売、接客を担当しておりましたが、現在は製品管理・配送部に勤務しております。

制度の感想としましては「非常に細やかな制度」というところが正直な感想になります。細かくカリキュラム分けされ、一つ一つ業務内容を理解、再確認していく上での大きな助けになったように思えます。もちろん、非常に細かいということはその分いろいろな苦労もふえるわけで、上司の「助成金をもらうのは本当に大変」という言葉が、なぜか印象に残っています。

今回、会社では私1人でのジョブ・カード利用でしたが、指導担当の社員の方の負担も大きいため、特に中規模・小規模企業では、複数人で同時に制度を利用するのは厳しいのかもしれないと、担当していただいた社員の方と話すこともありました。

ただ、今回訓練内容を明文化し、カテゴリライズしていく中で、私個人の職業能力のアップはもちろん、会社としても業務内容の再確認をすることができた点は非常に良かった。これからのことに何か役立てるのではとお話があり、私はもちろん、会社としてもプラスとなったとのお言葉もいただきました。

こういった制度の存在が、私もそうですが、正社員登用のきっかけとなったわけでありまして、もっと多くの会社や正社員の方々の手助けになってくれればよいというものが、ジョブ・カードを利用して正社員転換を目指す職業訓練制度を利用した感想です。

最後に、正社員へのステップアップを目指す若者に何かということ言えば、自分自身が周りの方々、今のココ・ファームの会社の方々と地元商工会議所を含め、いろんな方々と少しの運に恵まれて現在がありますので、偉そうなことを言える立場ではないのですが、ほんの少しでも何となくでも自分に合っているのではないかと。今のココ・ファームという会社が2年、3年と続けていくに当たって、自分に合っているのではないかと思えた職場でありましたので、こういった職場で長く続けて働いていけることを、そして働いていけば何か今回もそうですが、いいことがあるのではないかと考えております。

先ほども申しましたとおり、弊社ココ・ファーム・ワイナリーでは知的障害者の子供た

ちと一緒に生活しながら自立支援施設「こころみ学園」の園生とともに働いています。園生たちが毎日黙々と自分にできる仕事を続けているのを見てみると、私も見習いながら自分のできる仕事を一步一步進め、優れたワインを1人でも多くの方々に楽しんでいただけるよう、取り組んでいきたいと思っております。

○馬込治彦氏 初めまして。私は馬込治彦といいます。このような場所で話すことにとっても緊張しています。よろしくお願ひします。

現在、私は運送会社でトレーラーの運転をしています。工場で生産された自動車を宇都宮の南に位置する上三川町から横浜や茨城の港に運ぶのが主な仕事です。走行距離は1日300~400キロで、通常は夜から次の日のお昼にかけての勤務となっております。

私は高校を中退しまして、その後、高校卒業程度認定試験を取得しました。しかし、そのときはまだ働くことに不安があり、1人で過ごしていることが多かったです。その後、新聞でとちぎ若者サポートステーションの特集記事を読んだのがきっかけで、サポートステーション、短くしてサポステと言いますが、訪れるようになりました。

サポステでは、まずコーディネーターの方に悩み全般を聞いてもらいました。それから、相談員さんが実施している講座に参加するようになりました。場面を設定したコミュニケーションの練習が私にはとても役に立ったと思います。サポステの相談員さんとの面談の中で、自分の中に少しずつ何か気づき生まれ、働く意欲が出てきたかなと思います。

当時アルバイトは新聞配達やコンビニでの仕事をしていました。経済的に自立するためにまとまった時間働ける仕事をしたいと思っておまして、そのとき両親からも「就職の選択肢を広げるため、何か資格を取って見たらどうか」と言われました。サポートステーションに行ったときに、とちぎジョブモールの若年求職者バウチャー事業のパンフレットを見つけまして、私のいところが大型免許を取得したということも聞いていたので、自分もカウンセラーさんにアドバイスを受けながら、バウチャー事業を利用して大型の免許を取得しました。免許取得にかかる費用の一部を県から補助していただきました。

大型自動車免許取得後すぐに就職したわけではありませんでした。アルバイトは続けていて、その間も月に1~2回ぐらい相談員さんとの面談を行っていました。コンビニのアルバイトをやめるとき、やはりまとまった時間働きたいと思っていたので、そのことを相談員さんに相談しまして、ジョブモールのキャリアカウンセラーさんとの面談を勧められました。自分でも求人を探していると、大型トレーラーの求人を見つけましたので面接に行きました。その後、仮採用の連絡を受けて3カ月の見習い期間、この間、定期的にジョブモールに行きましてカウンセラーさんに相談をしました。仕事上の悩みを聞いてもらったり、仕事をするとき気をつけることや体調管理などアドバイスいただきました。ことし2月から正式に採用されたところです。

振り返ってみると、サポステのスタッフや相談員のアドバイスがよい刺激になり、相談しているうちにいろいろなことに気がつけるようになりました。自分も働くことができるのではないかという気持ちを持つことができ、人とかかわる機会もふえていきました。資格を取得してすぐに就職したわけではありませんでしたが、サポートステーションとつながり、いつでも相談できる状況にあったことが、その後の就職やジョブモールでのサポートにつながったのだと思います。

また、とちぎジョブモールの若年求職者バウチャー事業を利用して資格をとったことが採用に結びついたと思います。結果的にチャンスを得ることができたのだと思います。就職後、仕事を続けていくためにとちぎジョブモールで仕事上の悩みを聞いてもらったり、仕事をする上でのアドバイスを受ける面談を今でも続けています。モチベーションの維持にとっても役に立っています。

まだひきもり状態で、なかなか人とかかわれずにいる人や仕事に就けない人がいると思います。大切なことはサポートステーションのような機関がもっと広く知られて、多くの若者に利用されることだと思います。そして、サポステに相談すればいろいろな支援に結びついていくと思います。自分だけで抱え込まず、どこかに相談すれば、相談したところからいろいろな支援につながり、一歩踏み出すチャンスがふえていくのだと思います。

最後になりますが、働くようになってから家族が自分の力を支えてくれているものだと思うようになりました。毎日ご飯をつくってくれたりとか、資格をとるようにアドバイスをしてくれたことに今、とても感謝しています。家族との軋轢などを持っている人もいると思いますが、勇気を出して家族と会話されてはいかががでしょうか。人間関係が少しずつ自分が安心できるために変わっていくように思います。

以上です。ありがとうございます。

○中野氏 とちぎ若者サポートステーションの中野でございます。このような機会に説明させていただきますこと深く御礼申し上げます。

今、馬込君のお話を聞いていて、立派な社会人になったと本当に思って、とてもうれしく思っています。

資料4に基づきまして説明をさせていただきます。

まず最初のページをあけていただきますと、ニート等若年無業者に対応すべき社会的背景のポイント（栃木県版）と出ています。県内の若年無業者は今1万800人と報告されていますが、下のほうにあります雇用情勢、有効求人倍率は上がっております。アベノミクスの効果もあります。ただ、今まだ企業・工場・店舗が求めているのは、そこにもありますように即戦力、経験者、有資格者等で、なかなかこの中にニートなどの若年無業者が入っていけないという部分があります。ですので、まだまだそういった方々には一層きめ細やかな支援が必要だと考えております。

その下のページになりますが「学ぶ」から「働く」へとありますが、私どもの法人、徐々に成長していくのですけれども、20年ぐらい前から若者支援を開始しました。平成19年にサポートステーションを受託することで活動も県域に広がるようになります。圧倒的に相談件数がふえていくのですけれども、現在ではサポステを中心に、サポステで難しい若者への支援をサポステを土台にして自主事業で構築しております。

次のページをまたごらんいただければと思います。私どもの実績としてはことしで受託して8年目。実績としては新規登録者のうちの約半数が進路決定に結びついていると御理解いただければと思っています。年度当初に必ず目標値を設定しますが、ことしもこのままいけば目標値は達成できればと思っています。

先ほども知事もおっしゃってましたが、相談件数が非常に多くて、その中で多くの若者を就労へつなげております。

その下のページですが、サポステの支援メニュー。相談、体験、学校との連携などを中心に行っています。一人一人の個別具体的な支援等ということを一つの目標としまして、大切にしているのは何と言っても本人の就労意欲です。働きたいという思いです。その中でほかの企業にはなかなかできないような一人一人に時間をかけること、一人一人の課題に向き合うことを重視して行っております。

その次のページをおめぐりください。利用者のイメージですが、働きたい、何かしたいと思っているのですけれども、もう一歩が踏み出すことができない。特に青色の文字にもありますが、今まで公的な支援に相談できなかった若者、ハローワークに行きたいのだけれども、行けない。ジョブモールにもまだ行けない。そういった若者がほとんどだと思います。対人関係またはコミュニケーションに不安を持っています。そういった意味ではいきなりハローワークに行っても、なかなかそこで自分をアピールできなかつたりしますので、その意味ではこういったサポステの支援は非常に適切だと思っています。

多くの中には今回の懇談会でもあります再チャレンジという形で、一度挫折してしまったり、就職に失敗してしまった若者も非常に多くいらっしゃいます。そういった(段階にある)方々にサポステが非常に有効的だと思っています。

その下がサポステは若者支援の地域の核にとありますが、サポステの柱の1つにネットワークの構築があります。当然、我々も初めは、サポステを開始した当時は本当にサポステだけでやったわけなのですが、この7年間で積み重ねた実績の中で、とにかく数多くの地域の機関との連携をしていくようになりました。特に行政機関または行政関連機関が非常に多くて就労支援機関だけではなく、ここにもありますほとんどの機関との連携を隙間のない、切れ目のない支援を目指して行っております。

次のページ、サポステの支援に加えて、サポステだけの支援ではなかなか就労につながらないため、自主事業で、そこにありますように居場所事業であったり、学習支援事業であったり、独自の就労訓練といったものを若者に投げかけております。その下をごらん

いただきますと、それが具体的なサポステの現行事業とこのようになります。まずはサポステに相談に来ていただきます。サポステの相談から基本的にはハローワークやジョブモールを経て、平成24年度は140名が進路決定につながりました。また、サポステの相談から学習支援や就労支援を経て、同じように就労につながるという形できめ細かい支援を実施しております。

次のページをごらんいただきたいと思います。なかなか公的な機関につながらないという若者ですから、サポステによる支援につながらなく放置してしまったり、つながらない子はどうしてもそのままひきこもって、最終的には生活保護に至ってしまうリスクを秘めていると思っています。

それを具体的に示したものが下の図にあります。全国でもニートは60万人おりますが、仮にこれをサポステの我々が平成24年度就職につながった若者が155人だとしますと、その若者が将来的に生保(生活保護)にいくと、1年間でこれだけのものが損失してしまう。逆に就労・自立することでさまざまな納税でこれだけの形になります。年間これだけの増収を見込めるというのが、このサポステの一番大きなメリットの一つだと思っています。いわゆる税金で支援を受ける側から税金を納めて自分が社会を支える側にする。この自立、独立のその部分は、サポステは非常に最適な部分ではないかと思っています。

最後のページ、栃木県の若者支援におけるサポステの位置づけは非常に大きなものがあります。ひきこもり支援などはサポステがその就職の土台でなければなりません。サポステに来た生活困窮者の方にはボランティアネットワークと連携して対応しますし、ユースワークカレッジとの学び直し支援、ひよこの家との不登校支援など連携しながら、その先の進路決定につながっていきます。その意味でもサポステというのは地域の中でも非常に大事な部分であります。地域で動き出したらサポステ、就労意欲が出たらサポステという認識が県内で非常に広がってきています。そういった意味でも、特に再チャレンジするにはサポステは必要不可欠。そのためにもよく広がって、地域の方々からの期待もますます大きくなっていくのではないかと思っています。

以上です。ありがとうございました。

○末廣啓子氏 末廣でございます。きょうは懇談会にお招きいただきましてありがとうございました。

今、御紹介に預かりましたように、長い間、労働行政、とりわけ雇用問題に関わってまいりまして、その間で労働者派遣法の制定とか、失業なき労働移動や地域の雇用創出対策、それから、後の話で関わってきますが、1990年代後半に第3次ベンチャーブームというのがございまして、一斉に各省庁も起業支援策をやったのですけれども、そのときに担当としてさまざまな起業家の方とお話をしながら、起業支援策を立ち上げた経験がございま

す。8年前に大学に転職したのですが、こうした経験を生かしてキャリア教育をやるということになりました。何十年も雇用政策をやってきて、こんなに働き方が変わった時代というのはかつてないぐらいの話とっておりましたが、それが大学生に全然伝わってなくて、キャリア教育の重要性を痛感し、まずそこからやらないとだめだなと思って始めました。今、大学全体としてのキャリア教育体系を作ったり、キャリアセンターを運営したり、あるいは教員として授業や学生相談をして日々学生を見ておりますけれども、大人として何ができるのかと考えさせられる日々でございます。

今日はそんなことで、大学のキャリア教育の現場で見えることについてお話しさせていただければと思います。時間が非常に限られておりますのでレジュメに沢山書き込んでみましたが、かいつまんでお話をさせていただこうと思います。

まずレジュメの「キャリア教育とは」と書いてありますが、いろいろな言い方がありますが、変化に対応して主体的に進路を切り拓いていける力をつけさせる教育ということによっております。

次の3ページ「キャリア教育登場の背景」ですが、これは今さら御案内のとおりではありますが、非正規を含めて働き方がものすごく多様化しております、では選択肢が増えたのはいいことなのだけれども、若者に選択する力があるだろうかというところが問題です。また大人自身がキャリアパスが見えなくなっている中で、子供に背中を見せられない。企業も模索をしている中で長期的な人材育成をしなくなっている。その中で主体的に自分の人生は自分でキャリアデザインを描きなさいということが声高に求められる時代になっているということではないかと思っています。

また、先ほど中野さんのお話にもありましたように、地域におけるおせっかい力とでもいうものや家庭力がものすごく落ちてきているということで、一度つまづいた若者がなかなか立ち上がれない時代になっているのではないかと。3丁目の夕日という映画がありましたけれども、ああいう時代だったらひきこもっていても窓をあけたら隣のおじさんがおいどうしたと話しかける時代だったと思うのですけれども、そういう意味で言えばとても厳しい時代になったと思います。

それから、若者の状況として指摘されていることが次のページに書いてあります。今の若者もいいところがたくさんあるのですが、問題だということを書いております。上から2つ目の四角のところ、これは私が日々大学生を見ていても実感するのですが、やはり人間関係構築の点で問題があって、チームワークが苦手というか、チームそのものの必要性を余り感じないというか、それから、とても優しいのでお互いに傷つけないし、傷つきたくないために議論をしないし批判をしないし、とりあえずその話を受け入れてしまうという危ういところがあります。SOSを発しないと失敗を恐れる傾向もあります。

その背景に見えることとして、とにかくマニュアルとか親の指示で育ってきたので、放り出されて考える経験がないまま大学まで来てしまったということ、それから、大人がセ

ットした遊びでなく、自分たちで工夫して遊んだことのない若者が増えている。ですから遊びの中で育まれる他者との関係性がなかなか育っていかないのかなと思います。

5 ページ、では就職活動とか進路選択に向き合う学生の状況はどうか。不安が大きい学生は多いと思います。景気が良くなっても企業はこういう構造の中で厳選採用していて厳しさは余り変わらない。それで安易な安定志向と安易なフリーター志向がたくさんいます。一方で、フリーターとかニートに自分はいつかなるのではないかというような恐れを持つものも沢山います。それから、情報過多で情報不足の時代ということで、リストラだパワハラだブラック企業だという情報がたくさん入ってきますので、すごく不安を抱えている。今、女子学生が保守化しているという話がありますけれども、それは私も感じておりますが、その一因としては会社で働くとても大変だという印象が強いのではと感じていて、女子学生向けの対策をやり始めたところです。

一方で働く人のいわば当たり前の感覚が伝わっていない、つまり悪いことばかり情報が入って、働くのは7～8割はつらいけれども、1～2割はとてもやりがいがあるとか、喜びがあるという部分をどうやって伝えるかということもあります。マスコミ、就活支援会社、あるいは不適切なキャリア教育が、会社は皆即戦力が欲しいというような誤ったメッセージを発している場合もあり、また、自己理解というあまり、何か「適職」が予めあるような印象を学生に与えているとか、そういうことも学生の不安を増長し、6 ページにありますように学生ががんじがらめになっている状況があります。ですからそういう学生に対してどうするかというと、やはり多方面から包括的に、家庭や教育も含めて中長期で地道に対応しないと、雇用のマッチングの問題だけではすまないと感じております。大学としてもアクティブ・ラーニングとかPBL型授業とかいろいろなことをやって学生を育てているのですが、その中核を担って、率先して対応していかなければいけないのがキャリア教育だと思っております。

大学のキャリア教育の問題として、8 ページにあるようにキャリアセンターだけでなく専門教育も含め先生全員でやっていかなければいけないと思っております。9 ページに宇都宮大学の例を書きましたけれども、23年度から各学科の先生に新入生の必修科目の中でそれぞれが導入キャリア教育をやっていただくことにしました。これは言うは易し、行うは難しなのですが、そういうことで専門が社会でどう生きるかということをしちんと意識して教えないと学生が社会とうまくつながっていかないと思います。

10 ページですが、先ほど申しましたようなことで、支援をここまでやるかという声がありますが、ここまでやらないといけない時代になってしまったのかなということを感じております。

11 ページ、12 ページですが、主体性と起業家精神をどうやって身につけさせるか、わくわくした思いと夢をどうやって与えて学生を社会に出すかということがキャリア教の目指すところではないかと考えております。その基本として、生身の人間とどう触れ合わせて

コミュニケーションさせるかとか、あとは自己理解中心ではなくて世の中がどうなっているかとか、労働の諸問題や、例えば派遣労働って何か、この形で仕事しているとどういうことになるのかをきちんと正しく理解して、そこからいろいろ考えて、自分を見つめ直してもらおうという取組をやっております。

では、具体的にどういうことをやっているのかということで、後ろに参考資料で、本学の事例をつけさせていただきました。宇都宮市と連携した起業家精神育成の授業や産業界にご協力いただいているキャリアフェスティバルという大行事もやったりしております。

最後に14ページですが、お願いしたいことを手短かに申し上げさせていただきます。1つは若者の起業支援です。起業家精神の育成はとても大事だと思っております。ただ、すごく前のめりになって、視野が狭くなって起業以外に目が行かない学生もいるのです。ですからやはり志と人間の器の大きさがポイントだということと、計画と準備をきちんとやることの大切さについても理解させる必要があると思います。また、創業支援で昔はたくさんポータルサイトの良いものが政府関係機関などにあつたのですが、財政難等々で一斉になくなったりしました。こうした対策はぜひ息長くやっていただければと思います。

2つ目として中野さんからもお話がありました。ケアの必要な若者が増えていてやはりサポステとかいろいろな形で支援しないとやっていけないと思います。私も支援機関の方々とお話する機会がありますが、やはり政府の支援は必要だなと。それはお金の面であったり、いろいろなネットワークを強化することであったり、とても大事だと思います。

最後に、ぜひお願いしたいのですけれども、最近自己責任とか組織をあてにしないで生きていける力をつけるというメッセージがたくさん出てきているように私は感じていて、それが学生にも伝わっているのですが、学生を見ているとごく「普通」の若者が、やはり大多数は企業とか組織に入りますので、そこで安心して能力を身につけて、会社や社会を担っていけるようにすることが必要だと思います。幾ら希望を抱いて社会に出ていけるように背中を押しても行った先で社員が疲弊している職場等現実とのギャップがあると、キャリア教育をやっても意味がないことになるということ、ここのところすごく感じておまして、政府の皆様や経済団体のトップの方々がいろいろな形で、人が大切に、人を長い目で大切にすること、ぜひ併せてメッセージを発していただけると大変ありがたいと思っております。

○大田美智氏 よろしくお願いたします。

私は、平成15年8月に株式会社インシュランスに入社いたしました。当時は自動車部品の製造販売にかかわっておりましたが、若年層の自動車離れが進み、事業転換により不動産賃貸管理業の比重を高めました。平成21年5月に代表取締役役に就任すると同時に、自動車部門を売却し、それによって得た資金を新たな不動産購入に充当いたしました。

富裕層向け優良賃貸住宅 INSURANCE BLDG. のブランドを千葉県北西部にて確立いたしま

した。現在、8棟のマンションと2棟のオフィスビル、総戸数430戸の運営管理をいたしております。

平成23年は飛躍の年と考え、東葛地域だけでなく、総武線沿線にも進出しようと計画していた最中に東日本大震災に遭遇しました。

震災から2週間後、私どもは被災地を回り、その被害の大きさとすさまじい惨状を目の当たりにしました。自動車部品の製造販売部門に携わっていたころの協力会社が福島県の浜通りにたくさんございまして、その方たちのことがとても心配でありませんでした。

社内のミーティングで被災された方に何かお役に立てることはないかとみんなで話し合いをし、その中で温泉旅館を始めて、被災された方々や御家族を失った方を格安プランや無料御招待という形でお招きし、心と体を癒して差し上げようと考えました。

旅館事業に進出するに当たり、いろいろな方に相談いたしました。『異業種に新規参入して苦勞するよりも既存の事業を維持発展させた方がいいのではないですか』などの意見もございましたが、それでも私たちの意思はかたく、未知の世界に挑んでいくことを決意しました。私自身、温泉旅館といえども宿泊したことはありましたが、それを運営するとなると全くの素人です。それでも東日本大震災で大変な思いをされた方のことを考え、何とか復興支援事業を成功させたいという強い信念で頑張っまいりました。

何十件という温泉場を夏に車で回り、走行距離は1か月で6,000キロ以上となりました。私どもは福島県に候補を絞って物件を求めようとしましたが、最終的には9月22日、震災の6か月後に栃木県と福島県の県境近くにある那須町湯本のかつての名門旅館『十石荘』という物件を取得することとなりました。

物件を取得してからは、毎日が戦争のようでした。そのときはまだ自分が女将をすることになるとは思いませんでした。その中で30人くらいの職人さんの食事の世話を私が一人でやっていると、自然とみんなが私のことを女将さんと呼ぶようになり、そのまま女将となった次第です。

私どもの旅館名の頭には必ず『復興御宿 富双江葉大馬』がつきます。『富双江葉大馬』とは、福島県東部沿岸地域の特に被害の大きかった『富岡町』『双葉町』『浪江町』『檜葉町』『大熊町』『南相馬市』の6市町より1文字ずつ引用させていただき『富双江葉大馬』（ふそうこうようおおま）といたしました。

現在、7つの宿泊施設を保有し、うち3つの温泉旅館を開業運営いたしております。また、5月の連休前までにもう一つ、川俣温泉にて営業開始する予定です。一人でも多くの被災者の方を御招待して、私どもの旅館で勇気づけて差し上げることができれば幸いです。

また、私は企業経営者であると同時に母親でもあります。仕事と子育ての両立ができたのは、職住の場所が同じであったことが大きな要因です。

企業の経営をしながらの子育ては本当に体力が必要でしたし、ストレスも大きかったです。

す。社会問題となっております待機児童の問題には、早急に対応していただきたいと思いをします。

現在の時間枠では、せいぜいアルバイトかパートタイマーしかできない方が多いのではないのでしょうか。保育所での時間の幅を正社員や女性管理職向けに広げていただければ、もっと女性も働きやすくなると思います。

アベノミクスの成長戦略の中で『女性が輝く日本』の具体策として、25歳から44歳の女性就業率を2020年までに73%にする項目がございますが、私もぜひその政策を支持してまいります。私どもの旅館運営においてもスタッフのうち女性が過半数を占めており、管理職としての登用も積極的に行っております。女性が社会へどんどん進出していくことは、将来の日本にとってとても大切なことだと思っております。

現在、被災地の現状から見ますと、現政権における復興支援は着実に進みつつあり、震災直後に大きな問題でありました瓦れきの処理や除染の問題は比較的鎮静化に向かっております。ですが、仮設住宅での生活を余儀なくされていらっしゃる方や御家族を失った方の心のケアは、残念ながらまだ十分になされておりません。その部分を私どもで手助けできればと思っております。御宿泊してくださる方との心と心のつながりを大切にまいります。

私どもは、今年の震災(3年目にあたる)3月11日に『那須湯本十石』『塩原秘極の湯 葵』『塩原秘極の湯 紅』の3館にて、東日本大震災で大変な思いをされた方々を無料で御招待いたします。現在、既に54組約180名の募集に対して満室の御応募をいただいております。今後もこの企画を続け、1人でも多くの方を御招待できるように努めてまいります。また、私どもだけの力では限界がございますので、ただいま大手企業様、地元有力企業様を中心にお声かけをして、御支援と御協力をお願いいたしております。

最後になりますが、私がここまでやってこられたのは、東日本大震災で大変御苦労されている方に、少なからず支援の手を差し伸べることを基本理念に事業を進めてまいりました。それに対して多くの方からの御賛同をいただき、御協力と御支援をいただけたことです。

まだ、道半ばではございますが、これからも速度を緩めることなくこの復興支援事業を進めてまいります。そして、被災地の復興が進んで福島県を初め東北地方全体が元気を取り戻すことを願っております。

ありがとうございました。

○齋藤幸一氏 アップライジングの齋藤です。よろしく申し上げます。

高校時代、作新学院で全国チャンピオンになって、スポーツ推薦で大学に行ったのですがけれども、オリンピックの代表候補選手にもなりませんでしたけれども、オリンピックには行けず、プロボクサーになってからもチャンピオンになれずに引退しました。

大学時代は、スポーツ推薦ということでボクシングばかりやって、全然勉強しませんでした。自分の問題ではあるのですが大学に言いたいのは、スポーツ推薦で来た学生たちも、一般の学生同様もっと授業に参加させたり、厳しく 単位をとらせたりし、あらゆる方法で勉強をもっとやらせれば、日本にはもっともっといい人材があふれるのではないか。スポーツ推薦の場合はスポーツだけやっていればいいという文化があるので、それを変えて欲しいなと思います。

ボクシング引退後に健康食品のネットワークビジネスを始めました。マルチレベルマーケティングシステムという形なのですが、アメリカでは一つのビジネスの形態として確立されているのですが、日本ではまだまだいい印象が持たれていません。また、安易に入りやすいのですが、普通のビジネスと一緒に、一生懸命勉強して努力しないと収入にはならないシステムです。ですので、このネットワークビジネス自体が良い悪いではなく、しっかりとしたリスクがあるんだよ、そういう方法なんだよということを、教科書等に載せ、もう少し日本中の人たちが解るようになるといいのかなと思います。

私もシステムどおりにやれば大成功できるということで頑張りましたが、最終的には自分の実家、親の実家を担保にして消費者金融から1,200万円の借金をするまでになってしまいました。全然勉強しないでやってしまったので駄目でした。大学時代に法政大学を中退しましたので、資格も何もありません。私のような者は働き口がなく、牛井屋さんのアルバイトと、居酒屋のアルバイトを掛け持ちでやっていました。それが、28歳から29歳の頃です。

私は妻と娘で住んでいたのですが、アパート暮らしでテーブルも買えないで、段ボールの上でご飯を食べる ような感じでした。娘と妻と3人で1日に使えるお金が 500 円未満の生活をしていました。イエスタデーパンという昨日の売れ残りのパンが、5個まとまって300円で買えます。消費税入れて315円。この5個の中の1個の焼きそば パンで妻とけんかをして、妻が泣きながら実家に帰ってしまったということがありました。28歳から29歳のだいの 男が、これでは駄目だと。もっともっとビッグな人間になってやる。やるぞやるぞやるぞと思ったのです。決意をして、何とかなつてやると胸に思いました。

そのときに父がリサイクルショップの飛行船さんというところで働いていたので、私もそこを紹介してもらって飛行船さんに働きに行きます。リサイクル品を販売する側の人間ではなく、粗大ごみを回収するほうの部門でした。ゴミステーションに出せないようなタンスとかベッド、そういったものをお客さんからお金をいただき、それを処分場で処分して、差額が利益になるという方法なのです。完全歩合だったので一生懸命やればやるほどお金になります。一生懸命やったら、1か月目から牛井屋さんと居酒屋のアルバイトを合わせた給料よりもいい給料がとれるようになったのです。

飛行船でしっかり修行をして、2か月半で独立しました。独立後、粗大ごみを集めていく中でタイヤとかアルミホイールを出してくれるお客さんが出て、タイヤとかアルミホイールをゴミとして出すのですけれども、これは使えるのではないかと。タイヤをリサイクルして販売したいと思いました。でも借金もまだまだあったので何か方法はないかなと思っていたら、無店舗でもできるインターネットオークションに出会います。これだったら大丈夫だろう。最初に資本もほとんどかかりません。出品するのに1商品10円でした。始めてみると全国の人に売れるようになってきたのです。そのうちに店頭販売もしたいと思ひまして、そこでだんだん借金も減ってきたのでアップライジングというのを設立し、アルミホイールの修理や海外輸出も始め、7年目の売上が3億8,000万になりました。現在は群馬県に太田店を出すことができました。

再起業を振り返って行政に望むことというのは余りないですけれども、私はニュービジネス協議会や倫理法人会に入っているのですが、そこで無料のセミナーというものがたくさんあります。そういったものを役場のホームページだったり掲示板に載せてもらえれば、お金のない人でも無料のセミナーを受けに行けるのではないかと思います。

また、現在の地域貢献の取り組みです。近江商人の言葉で「売り手よし、買い手よし、世間よし」があります。地域社会に貢献するCSR活動がこれからの日本をよくしていくと思います。うちの会社は宇都宮店と太田店両方の近隣の小学校で挨拶運動を毎日やっています。児童が安全に横断歩道を渡れるようにするためと、挨拶ができる子供になってほしいというのがあります。東日本大震災の復興支援ボランティアとして、栃木照る照る坊主の会、栃木さくら11でも活動しております。栃木照る照る坊主の会では、現在まで2万食のラーメンを炊き出ししたり、チャリティーイベントをやっています。また、栃木さくら11として東北3県に桜を植えに行っています。あしたも山田町に桜を植えてきます。日本を美しくする会「掃除に学ぶ」の活動の一環として宇都宮の駅前の掃除を月に1回やっています。私だけではなく、従業員も参加しています。心を洗い、心を磨く。これをやっております。

また、栃木県にはプロスポーツチームが数団体ありまして、当社はバスケのリンク栃木ブレックス、宇都宮ブリッツェン、那須ブラーゼンという自転車のチーム、トライアスロンの村上塾をスポンサーしています。栃木県内の新聞には毎日のように県内のスポーツが出ています。日本一を目指すチームが栃木県にあることで、栃木県が1つになり、地域経済も絶対に活性化すると思います。

また、先ほどお話もあったのですけれども、当社もOJT、OFF-JTを使ったジョブ・カードを使って、アルバイトが正社員に4人ほどなりました。当社は施設外就労という制度を活用して、宇都宮店で知的障がい者さんを3人。監督者1人、太田店でも4

月から知的障がい者さんを3人プラス監督者1人で雇うようになります。障害者さんと協力して働くことで、日本人本来の優しい気持ちを取り戻して、地域も会社も発展していけると思います。

雇用に関してですけれども、アップライジングとしては若者でも主婦でもやる気と能力があればどんどん雇用したいと思って、ハローワークに求人を出しているのですけれども、なかなか来てもらえない。潜在的に働きたいと思っているのですけれども、なかなか面接まで来ない人が多い。こうしたことに対して職場体験とか職場見学が出来る会社を掲載して頂きたい。職場の雰囲気も解ると思うので、面接する時にはコミュニケーションがとりやすくなると思います。

個人的には、消費者金融などの借金で苦しい思いをした経験があるので、初めて起業される方はしっかりとしたお金の使い方、明確な目標を持って融資なり事業をしてもらいたいと思います。再起業される方にはまず軌道に乗るまで無借金経営を心がける。そうすればお金の大切さもありがたみもわかります。経費の無駄遣いも減ると思います。そうやってどんどん大きい会社ができるいけばいいなと思います。ありがとうございました。

○須田秀規氏 資料8でしょうか。再チャレンジ懇談会に向けてということで、私自身も再チャレンジの振り返りと現職を通じまして再チャレンジについて思うことを述べさせていただきたいと思います。

私の再チャレンジというのは家業を継ぎまして、それが倒産して、24億ほどの保証債務を背負い自己破産したことから始まりました。その自己破産から中小企業診断士という資格を取得しまして、経営コンサルタント事業を行っております。破産してからいろいろな方々との出会いや支えがあって、そのおかげで私なりの道筋というものを見つけられて、現在、中小企業の再生支援を中心に、経営革新、創業、近年は6次産業化とか農商工連携とか、そうしたお手伝いなどを行っております。特に栃木県の場合には足利銀行の破綻をきっかけに県を挙げて地域の中小企業の事業再生に熱心に取り組んできました。再生支援協議会の支援件数も日本一と聞いておりますが、私としては、そのような環境の中で自身の失敗体験を活かして地域の企業支援を行なう今の仕事を天職と思って取り組ませていただいております。

倒産の振り返りですけれども、私自身、今、齋藤さんがおっしゃったような優秀な経営ができたよかったです。それなりの決意をして親の後を継いで結局倒産に至ったわけですが、省みると大分未熟な経営者だったと実感しております。ほとんど無免許運転だったと思います。気持ちだけで、やる気だけで、責任感だけで家業を継いで、結果的に多くの人に迷惑を振りまいてしまいました。事業者というものは倒産の後の生活の不安が第一にあります。私の場合も、倒産については考えたくない、廃業したくない、そうした不

安が先あって、無理に無理を重ねた挙句に倒産するという最悪の倒産のパターンを歩みました。倒産回避のために、給料の未払や親戚や知人に借金を重ねたり、迷惑を広げて倒産した訳ですが、今振り返ると、倒産に踏み切るのが遅すぎた、そのためにしなくてもよい迷惑の拡大をしてしまったと反省しています。

そこで学んだことですが、まずは経営者心理としまして誰にも相談できない追い詰められた心理というものがあると実感しています。当時の私は、そのような経営者心理を理解した上で、心の支えといえますか、適切な判断とかアドバイスいただけるようなそういったサポートを求めているのだらうと思います。経営改善も病気と同じで、早期発見と早期の治療が重要なことです。しかし病気の進行度合いによっては、何でもかんでも再生だということではなくて、経営者の生活や従業員の保護、債権者の調整など、会社の廃業を含むベストな問題解決を経営者とともに探っていくようなサポートが必要だと思います。それは一方で経営者の心の支えです。私の場合には担当いただいた弁護士先生あるいは中小企業診断士の先生、もちろん家族もそうですが、そうした方々の支えがありました。時々声をかけていただいたり苦境から這い上がった方の例をお聞きするなどして、自分もやり直せるという気持ちをもつことができました。

このように、自身の未熟さが招いた事業倒産とそれによる迷惑を振り撒いてしまった失敗から、心を支えてくださった方々のサポートがあって思いがけず中小企業をサポートする側に就きました。私としては、これは社会とのご縁と思っています。未熟な経営による家業の倒産で迷惑をかけてきた恩返しとして、当時の私のような状況で苦しんでいる中小企業経営者さんの支えになることを天職と思って仕事をしております。

現職から再チャレンジを含む中小企業施策について思うことなど、少しだけ述べさせていただきます。

1つは創業支援。創業支援強化のために今回、市町村を中心に包括的な創業支援が行われる、そんな施策が講じられる運びと聞いております。これまでは、創業支援と言うと商工会や商工会議所、経営支援課など経済産業省関係に偏り、農業や福祉、なんらかの社会貢献など多様な創業希望者が、行政の縦割りの中で適切な創業支援を受けづらいということがありました。今回、市町村がそこに入ることで横断的かつ有効な対応ができるのではないかと期待しております。

もう1つは事業の再生についてです。これについても先ほど申し上げましたとおり、何でもかんでも再生というレベルは超えているのだらうと思います。中小企業金融円滑化法が終わってから政策パッケージに移行しましたが、徐々に金融機関の目線が厳しくなっているのを支援者として肌で感じております。再生支援機関は原則的に再生目線で企業をみますので、再生できないところはふるいにかけてしまう。ふるいにかけてられた企業は誰にも言えない悩みを抱えながらどうしようかという形で置き去りにされていくよう

な状況が見え隠れしております。私と同じ時期に家を継いだ知人にも、家業を続けながら夜バイトをして生活を支えているという例も少なくありません。生活不安から事業をやめられない、しかし事業では食っていけない、そういう方々が徐々に増加しているのが現時点での特に小規模事業者の現状だと思います。昨今、経営者保証に関するガイドラインが発表され、円滑な廃業に踏み出せる政策が打ち出されました。その周知と有効な運用を期待しています。私としても企業支援を通じて、これまで以上に経営者の心のサポートや廃業支援にも取り組んでいきたいと考えております。

つたない話ですが、そんなことが何か参考になればと思います。どうもありがとうございました。

4. 意見交換

○稲田再チャレンジ担当大臣 出井さんは非正規から正規に転換され、非常にジョブ・カードを使ったことで会社にとってもすごくよかったとおっしゃったのですけれども、これから会社でどのようにキャリアアップ、自分としてはどういうふうさらに夢を実現していきたいと思っていらっしゃるのでしょうか。

○出井正貴氏 そうですね。まだ正社員として雇用していただいて、ちょうど今1年にならないぐらいなのですけれども、やっと全体的な仕事にも慣れてきたところでありまして、これから何かそれよりは本当に知的障害を持った子供たちと、私が働いている場所では4人の子と毎日同じ仕事をしているのですが、そういった子供たちは「あれお願い」と一つお願いすると、それを黙々とやってくれるのです。それが1日だろうが1週間だろうが同じ作業、ビンにラベルを貼る作業だったり、それこそ箱を組み立てるだけの作業でも黙々とすごく飽きず、飽きるのかもしれませんが、黙々と文句も言わずにやってくれるので、それを見習いながら、少しでも役に立てるように、特にお客様と接客してセールスをかけるという立場でもないのですが、一番いいのは多くの人に来ていただいて、こういった機会に参加させていただいたことでも、少しでもうちのワインに触れる機会を持っていただけるようになったらなと思っております。

○稲田再チャレンジ担当大臣 ありがとうございます。

では馬込さんと中野さんのお二人に一遍に聞きますけれども、すごくサポステが効果的だったというふうにお話だったり、また、サポステとジョブモール、バウチャー制度を組み合わせて、うまく連携ができていますなど。先ほど知事がおっしゃったようにすごくうまく連携ができていますんだなと思えました。

一方で、サポステに来られない人たちも潜在的にすごくたくさんいらっしゃるのかなと思ったのですが、馬込さんには気づきが生まれたということを言われたので、どういう、すごく自分の気持ちが一変するような出来事とか言葉がけとか、何かそういうアドバイスがあったのかをお聞きしたいと思います。

あと、中野さんには連携をすることにおける課題ですとか、1万人いらっしゃる中でまだ家を出られない方もいらっしゃると思いますので、お伺いしたいと思います。

○馬込氏 サポートステーションとジョブモールでスタッフの方と相談、面談をしたときに、そのときに必要なことが聞けたというか、話の後にそうか、そうだよなと思ったりとか、今、浮かんだ言葉が一つあるのですけれども、叱られたというのですか、ちゃんと叱ってもらえたときの感じというか、または自分の引っかかっていたことをようやく許してもらえたとか、そんな気持ちに近かったような気がします。

○中野氏 それでは、ネットワークの課題というか、やはりこまめにネットワークをつくるために歩き回ることが非常に大事だと思っています。それぞれの部署によってさまざまな課題があるかと思うのですが、それは目的は若者の自立というのは考えることである程度実現できるのかなと思います。

あと、まだまだ潜在的に眠っている方がいらっしゃる。ただ、基本的にはその方も働きたいと願う子も実際に多くいるわけです。ですから個人的な見解ですが、やはり県とこういう形でつながらせていただいていますので、県域の中で、県行政と非常にかかわりがあるのですが、例えば市町村行政の中ではまだまだ若者支援はどこの課がやるかというのは不透明な部分があったりします。そういったところにもっとアプローチすると連携をもっと組んで、より身近な方々で、あそこにああいう方がいるよということがつながっていくことかできれば、こちらからまたさまざまなアプローチもできるかと思っています。

以上です。

○稲田再チャレンジ担当大臣 ありがとうございます。

あとお二人の女性にお伺いしたいのですが、末廣先生からは女子学生がすごく保守化したと言われて、私はそうなのかなと、少し意外な気持ちがありました。そこを少し聞きたいのと、あと、大田さんには若者であり、女性であり、お母さんであり、そして起業されて、しかも自分がやっておられた自動車部品とは全然違う部分、旅館業という全く違うことにチャレンジするというのは物すごく私は勇気だと思うのですけれども、それを突き動かすようなものは何だったのかということと、それに対して国や県とかからの支援というのは何かかかわっていたのかという点を聞きたいです。

○末廣氏 保守化したと言っても全員が保守化したわけではなくて、もちろん元気よく自立して生きていこうという学生もたくさんいることは確かなのですけれども、一方で、先ほど少し申し上げましたように厳しい現実を聞くにつけても、両立はできないのではないかと最初からあきらめてしまったり、悩んでしまったりして、家庭に入ろうかななんていうようなタイプの学生も目にするようになりました。また、学生にフリーターをしている

友達とか知人にインタビューをさせいろいろと考えてもらう授業をしているのですけれども、そのときに「フリーターでも男と女と違いますよね、女のフリーターは結婚しちゃえばいいから」というという発言が出てくるあたり、わたしも結構ショックだったです。それは、現実がまだまだ女性にとって厳しいということは勿論ありますが、一方で、まともな企業は女性活用を真剣に考えていることや、様々な支援策の存在、女性同士の支え合いのネットワーク等いろいろな努力がなされているという現実を知らないということもあると思います。ですからそのあたりをきちんと知らせ、ロールモデルをどんどん見せて、大丈夫だよというメッセージや、自分でも頑張らなきゃねというメッセージを発することも重要だと思っています。世論調査でも保守化傾向が出ているような話は聞いておりますので、全国的にもそういう傾向があると思います。

。

○大田美智氏 異業種からのチャレンジについての御質問ですが、基本的には人と人とのつながりであったりとか、あとはよくしてもらったことを返したいという基本的なもの、気持ちの問題だと思うのです。自分たちがお世話になった方々が福島県の浜通りのほうにたくさんいらっしゃって当時の私たちの事業に協力してもらいました。通常、物をつくってくださいと言ったときにある程度のコストがあると思うのですけれども、それをかなり抑えていただいて、自分たちのために頑張っていたという部分で何か恩返しをしたいという気持ちから、新規に旅館事業に入っていました。私自身、旅館の運営を始めるに当たっての準備段階のときに、二人の男の子の面倒をみてまた、お腹の中にも子供がいました。本心としては母親であるという部分で考えると、つらい部分も確かにありました。体調的にもそうですし、お腹が大きい状態で車を運転してあちこち飛び回ったりとか、昼夜関係なく飛び回っていましたので、その辺では本当につらいなと思った時期もありました。でもやはり人としての部分で恩返しをしたい。あとは自分が実際に千葉県にいるときに、東日本大震災を経験してとても不安だったことがあり、そういった不安に対して少しでも心のケアができればなという思いで頑張っておりました。

それから、国や県からの支援は特には受けてはおりません。3月11日に被災者の方を対象とした無料宿泊招待会を実施しますが、民間企業様や浜通りの市町からのご協力は頂きました。私たちだけの力では被災された方への心のケアだけでも限りがございます。ぜひ、国や自治体の後押しがあればなと常々思っています。

○稲田再チャレンジ担当大臣 齋藤さんと須田さんのお二人は、1,200万と24億と随分額は違ったのですけれども、借金があつて、でもどこかでそれを吹っ切って再チャレンジされたのですが、どちらかと言うとだらだらと続けてかなり損害をふやす人とかすごくいる

と思うのですが、そういう意味で吹っ切って起業するときのきっかけとか、それに対する支援について伺いして、最後に知事にはこのネットワークの構築、連携はすごくできていると思うのですが、県独自でバウチャー制度を進めておられたりとか、いろんな検討をされていますが、その御苦勞と課題についてざっと聞きたいと思います。

○齋藤幸一氏 僕のきっかけはこれです。かみさんが泣いて実家に帰った。しかもこの300円のパンの中の1個の焼きそばパンで、俺はどこまで落っこったんだろうというので、そこで絶対にもう男だったら復活してやるぞと強い自分の中の決意がそのときに改めてこれだと思ったのです。作新学院で一生懸命ボクシングを頑張ってきたというのもあるのですけれども、何かのきっかけで人は変わるんだなと思いました。

それで今、私はすごくいろいろなことをやっているのですけれども、いろいろなことをやれる、そのボランティアのきっかけも3.11でその後、炊き出しに行つて気仙沼の避難所の人たちが、ラーメンの炊き出しをしたのですが、ラーメンがおいしい。けれども、それではなくて栃木から来てくれて大きな声で「元気出せよ」とか「生きていこうぜ」とか、そういう何か大きな声で私は生きる勇気をもたらされたと言われて泣いてしまったのです。そうなんだと思って。人が喜んで私もすごくうれしかったので、人が喜ぶということ、人を喜ばせる、人が喜んでくれるということが今の私のいろいろなもののきっかけであり、それによっていろいろなことができている。自分の趣味も、自分が楽しいというだけだったら自分だけなのですが、人を喜ばせることが趣味と思えば、人が喜んでくれるのだったらこうしよう、ああしようというのでどんどんいろいろなことができるなと思いました。これはビジネスにもつながるなと思います。きっかけはそんなことでした。ありがとうございます。

○須田氏 私が何とか頑張らなきゃと思ったのは、やはり家族です。一つは倒産した時点で6か月の赤ん坊がいて、それで嫁が逃げずに済んだのだと思うのですが、そこで嫁に逃げられていたら、多分、自分は自分だけ食っていければいいやということで何か違うことをしていたのだらうと思います。もう一つは安定した再就職でなく個人事業で独立することを支えてくれたのも家族です。家族のために踏んばらなければという思いが一番強かったと思います。

もう一つは、それを支えてくださった弁護士の先生、会社の破産を手伝っていただいた先生に頑張れよということの時々おっしゃってくださって、大変それが支えになりました。

実際に資格がとれて動き出しても、結局はコンサルとしての実務経験がなかったですから生活は困窮していました。先輩の診断士の先生のかばん持ちみたいなことをしながら徐々に経験を積んできたのですが、そうした中で経営状態や経営者のお気持ちがよくわかって、指摘した問題点や提案した改善策を熱心にお聞きいただき、それが経営者のやる気を引き出した時など、経営者と心が1つになれたような、そんなとき本当にお役に立てたなと感じます。経営者が意欲をもって取り組めば経営は少しずつ変わります。その結果、

その後も長いおつき合いにつながりますが、それが今の私の仕事のやりがいになっています。

以上です。

○福田栃木県知事 バウチャー事業を大げさながら使ってもらった。中野さんのアドバイスもあったわけですが、引き続きそういった取り組みを行っていきたいと思いますので、使い勝手をよくするためにはどこをどう改善したらいいか、ぜひともアドバイスを使った人に御意見をいただきたいと思っております。

末廣先生からキャリア教育の話がありましたけれども、小中学校、高等学校もそうですが、小中学校でどういう教育をしたらいいのかというのをぜひ教えてもらって、義務教育、私学も含めてその中で職業観みたいなものを持ちながら大学に行くとか、高校に行くとか、その役割をどう担うかというふうに考えましたのでお聞きをしまして、そういうものを我々に教えてもらえれば、栃木県独自に取り組むべきものがあるとなれば、それをやっていきたいと思いました。

それから、大臣にもお願いをしたいのですが、先ほど来お話がありますように、いろんな機関が連携をしながら個に講じた支援というものが若者の自立のためには必要だというお話をお聞きしましたので、サポステ事業については費用を行革推進会議のレビューで見直しが求められているとお聞きしておりますし、また、26年度の選定については基準が幾つか設けられて強化されているのです。しっかりとチェックしますよということになってきたようですけれども、大いに基準は、ハードルは高く上げてもらって、そして必要な成果を上げているところについては引き続き頑張れと、こういうお墨つきを国からいただくとともに、中野さんのところも栃木県の中にありますけれども、やりがいが持てるのではないか、成果が上がるのではないかと思っておりますので、以上、お願いいたします。

以上です。

○木下審議官 ありがとうございます。

時間がそろそろまいってきましたけれども、資料に今日お話の中で御指摘を受けた、例えばジョブ・カード制度ですとか、今の中野さんの若者サポートステーション、それからミラサポといいまして、これは中小企業庁のインターネットサイトなのですが、その中にいろいろな企業に対する支援策などを掲載したポータルサイトなど、関連する施策を掲載していますまた、あるいは企業経営者のための資金繰りなどいろいろな相談をどういふところに行えばよいかよくわからない場合に、それを総合的にサポートするような事業を中小企業庁が来年度の事業で41億を計上し行います。このような事業も今後皆様が何かのきっかけでお使いになれる場合の参考でございます。

先ほど須田様のほうからありましたように、経営者保証の関係、個人の事業で保証をと

るときに金融機関がかなりの額で、それ自身で倒産した場合には身ぐるみはがれて次に再起できないような状況になる場合もあるので、一定の条件を満たせばそういったところについて保証を一部求めないとか、あるいは生活資金くらいはとっておくというような形で、ガイドラインの策定もいたしましたので、参考までにつけてございます。

6. 稲田再チャレンジ担当大臣締め括り挨拶（プレス入り）

○稲田再チャレンジ担当大臣 本日は本当にお忙しいところお集まりをいただきまして、ありがとうございます。

第1次安倍内閣も第2次もそうですけれども、総理自身が再チャレンジ、何度でも失敗しても立ち上がるという人を支援したい。御自身自身も自分は再チャレンジであるということもおっしゃっていますし、私も1月にアメリカに出張しまして、日本はいろんな起業とか再チャレンジもそうですけれども、支援策はあるけれども、その再チャレンジに対する社会全体の理解というのがまだまだ足りないのかなということも感じました。

今日は本当に時間が短くて、まだまだお聞きしたいことがいっぱいあったのですけれども、それぞれの皆さん方から施策に対する御意見等々、これから実行していく上でも有効ないろんな御意見をいただいたと感謝しております。

知事にも同席いただきまして、本当にこの栃木県を選ばせていただいたのは、やはりすごく関係機関の再チャレンジ施策、様々な施策が非常に有効に機能しているということで取り組みを見せていただいたのですけれども、きょう来られた方々からも様々な支援策、サポステや県の若年求職者バウチャー事業や厚労省・商工会議所のジョブ・カードの活用等を本当に組み合わせていただいているということを実感することができました。また、再チャレンジを果たされた皆様方から、なぜ再チャレンジができたのかというきっかけをお伺いしましたけれども、それぞれ出井さんも、馬込さんも、大田さんも、齋藤さんも、須田さんもそれぞれ共通していたのは、色々なことに気づく瞬間があって、それが自分のためではなくて社会のためであったり、いろんな人たちに恩返しであったり、そういう気持ちを持ったときに人は再チャレンジできるんだなという精神的な面のお話も聞かせていただきましたし、また、サポステの中野さん、そして大学で研究している末廣先生からは、これからの再チャレンジ、若者支援の課題についてお話をいただきました。

私も再チャレンジ担当大臣であると同時に行革担当大臣でもありまして、やはり予算を削るということではなくて、非常に有効な事業としてPDCAサイクルを回していくというのでは非常に重要なことだと思っておりますので、きょう皆様方からいただいた御意見を施策にも生かしていきたいと思っておりますし、この後また現実に視察も行かせていただきますので、それも参考にさせていただきたいと思っております。

本日はどうもありがとうございました。